4.悪性腫瘍・画像

[P04-06]Diagnostic performance of FDG-PET for Cervical Lymph Node Metastasis in Oral Squamous Cell Carcinoma

○Hironobu Fukuda[1], Eiji Kondo[1], Hiroki Otagiri[1], Kiriko Kubo[1], Masao Hashidume[1], Masahumi Morioka[2], Hironori Sakai[1], Shinichi Yamada[1], Hiroshi Kurita[1] (1.Department of Dentistry and Oral Surgery,Shinshu University School of Medicine, 2.Dentistry,Dental Oral Surgery,Iida Municipal Hospital)

ポスターを表示

(目的)FDG-PET検査は、悪性腫瘍の原発巣やリンパ節転移、遠隔転移等の評価に頻用されている。代謝活性に基づき診断する為、 SUV値による定量的評価が可能であるが、腫瘍の大きさや全身状態が検査結果に影響を及ぼすとされている。今回我々は口腔癌患者における PET検査のリンパ節転移診断精度と他因子の影響を検討したので報告する。(方法) 研究対象は信州大学医学部付属病院特殊歯科・口腔外科を2017年～2020年に受診し口腔扁平上皮癌の診断下に PET検査を実施し、頚部郭清術を行った30例とした(術前治療を施行した例は除外)。頚部リンパ節の SUVmax3.5以上を転移リンパ節と診断し、頚部郭清組織内の病理組織診断と照合することで、リンパ節転移診断精度を調査した。また全身状態、局所所見（転移リンパ節の長径等）の副次的評価項目との関連性を検討した。(結果)リンパ節転移診断は感度78.4%、特異度97.9%、陽性的中率64.4%、陰性的中率98.9%であった。真陽性例と偽陽性例を比較すると、真陽性例は早期像・後期像の SUV値が高く、また転移リンパ節が大きい傾向を認めた。また今回調査した30例において糖尿病有病率は30%であったが、偽陰性例では60%と多く、糖尿病が PE T診断精度を低下させる可能性が考えられた。

©Japanese Society of Oral Oncology